

[研究論文]

私的言語と規則

塚原典央

○はじめに

ウィトゲンシュタインは一貫して言語をめぐる哲学を展開した。そして彼は『哲学的文法』（以下『文法』あるいはPGと略記）を中心とする中期哲学では言語の「文法」を、また後期哲学の主著である『哲学探求（以下『探求』およびPUと略記）』では「言語ゲーム」における言語使用行為を問題にした。小論ではこの中期から後期への哲学的思索の展開に注目したい。

この展開において決定的な役割を果たしている議論が、「規則に従うこと」に関する考察に他ならない。そしてこの規則遵守の問題については、当然クリプキの議論を無視するわけにはいかない。というのは、この規則遵守の問題こそ『探求』の核をなす議論だ、と主張したのはこのクリプキだからである。しかし事情はかなり込み入っている。クリプキが展開した議論そのものは知的刺激に満ちた哲学における第一級の議論であり、この点は誰も疑いはしないだろう。そして、確かにクリプキ自身「この本は『ウィトゲンシュタイン』の議論の解説でも、『クリプキ』の議論の解説でもなく、むしろクリプキの心を打った限りでの、そしてクリプキに問題を提示した限りでの、ウィトゲンシュタインの議論の解説である、と考えられるべきである（Kripke p. 5.）」と一応断ってはいる。しかしそうはいつでも、クリプキの議論と『探求』との関係は問題となる。そして、クリプキの提示した議論は『探求』の解釈としては、はなはだ評判が悪いのである⁽¹⁾。

ところでクリプキは、この規則遵守の議論が「感覚に適用された『私的言語論』は、言語に関してそれ以前に議論されたよりいっそう一般的な考察の、単なる特殊な場合に過ぎない（Kripke p. 3.）」と述べている。つまりクリプキは、『探求』における私的言語批判という議論は規則遵守の問題という一般的な考察の一応用例、あるいは系の一つに過ぎないと考えている。しかしここでは逆に、感覚語「痛み」の習得という視点から、規則について、そして言語ゲーム論という後期ウィトゲンシュタインの言語観を捉え返してみたい。

受付日 2004.11.1

受理日 2004.12.7

所 属 福井県立大学学術教養センター

○私的言語批判

『探求』において、感覚語に関して言語ゲーム論が乗り越えるべき言語観として挙げられているのが「私的言語」である。ウィトゲンシュタインは私的言語を次のように規定している。この「言語に含まれている語は、発話者のみが知り得るもの、つまり発話者の直接的で私的な感覚を指し示さなければならない。それゆえ他人はこの言語を理解することができない (PU I §243)」。例えば私的言語において「痛み」という語は、私だけが知りうる痛みという私の私的感覚を指し示している。言い換えれば、私の私的な感覚という対象に、「痛み」という名前が結びつけられている言語に他ならない。したがって「痛み」という語の意味は、この語が指し示している対象である私の私的感覚ということになる。つまり私的言語とは、語の意味をその語の指示対象にとる「意味の対象説」に基づく言語ということになる。そしてこの意味の対象説は、前期ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考 (以下『論考』と略記)』の言語観に他ならない。『探求』は『論考』批判の上に成り立っているが、私的言語批判もその一部をなしているのである。

『論考』において言語は、世界の持つ論理形式を世界と共有することによって、世界の像となっていた。語の意味は世界に存在する対象であり、命題の意味は世界において成立しうる事実⁽²⁾に他ならなかった。つまり世界が言語を規定していた⁽²⁾。同様に、私的言語の「私は歯が痛い」という文は、世界において事実として成立している私の私的感覚である私の歯の痛みと、論理形式を共有する像ということになる。「痛み」という語の意味、そしてこの語の文法は、世界において生じる私の私的感覚である私の歯の痛みによって規定されていることになる。

ではこの発話者のみが知り得る発話者の痛みという私的感覚を意味にとる、私的言語としての「痛み」という語は、どのようにして習得されるのだろうか。いやそもそも習得可能だろうか。われわれは自分の私的感覚を、他人のそれと直接比較することはできない。つまり大人が子供に「痛み」という感覚語を教える場合、その大人には子供の痛みという私的感覚を直接捉えることはできない。言い換えれば、大人は子供がいつ痛みという私的感覚を持ったのかを知ることができない。したがって、大人は子供に、いつ「今、君が感じている私的感覚が『痛み』というものなのだ」と教えればよいのか分からないのである。直接私的感覚を指し示す仕方で、「痛み」といった感覚語を教えることは不可能なのである。

○「痛み」という言葉の習得

では「痛み」といった感覚語はどのように習得されるのだろうか。ウィトゲンシュタインは『探求』で次のように述べている。

PU I §244：しかし名前とそれによって名づけられたものの結合は、どのようにして確立

私的言語と規則

されるのか。この問題は、人間は感覚の名前——例えば「痛み」という語——の意味をどのように学ぶのかという問題と同じである。この問題に答える一つの可能性は、語が感覚の根源的で自然な表出と結合され、そしてその代わりに使われる、というものに他ならない。例えば、ある子供が怪我をして泣き叫ぶ。すると、大人たちはその子供に声をかけ、まず感嘆の表現 [例えば「痛い!」] を教え、後に文章 [例えば「私は歯が痛い」] を教える。大人たちはその子供に新しい痛みの振る舞いを教えるのである⁽³⁾。

「するとあなたは、「痛み」という語は実は泣き叫びを意味している、というのか。」——とんでもない、痛みの言語的表現は泣き叫びの代わりにするのであって、それを記述しているのではない。

大人は子供に泣く代わりに「痛い」という言葉を発するように教える。しかし言葉をまったく習得していない子供に、最初から『エーン』と泣く代わりに『痛い』と言いなさいと、言葉だけで教えることはできない。転んで膝をすりむいて泣いている子供を抱き起こして「痛いねー、痛いねー」と膝をさすってやったり、テーブルの角に頭をぶつけて泣いている子供の頭に手を置いて「痛いの痛いの飛んでいけー」と言ってやったり、予防注射を受けて泣いている子供に「痛かったねー、よく頑張ったよ」と声かけして抱きしめてやったりする。このように子供が泣いているときに大人が「痛い」という言葉を反復して聞かせる事が必要だろう。そしていつか大人は「今度からは泣く代わりに、何処何処が痛いよ、と教えてね」と教え、子供は泣く代わりに「痛い」と言うようになって行くのだろう。

ここで幾つか注意すべき点がある。一つ目は、大人は子供が痛みを感じて泣いているであろう場合に、「痛い」という言葉を使って見せなければならない。例えば、子供が眠くて泣いている場合や、おむつが濡れて泣いているときに、「痛い」という言葉を聞かせてはならない。言い換えれば大人は、自分ならば痛みを感じるであろう状況に子供がいる場合に、「痛い」という言葉を使わなければならない。言葉は後天的に習得するものであり、「イタイ」という音声も一つの記号である以上、例えば子供が泣いているあらゆる場面で大人が「痛い」という言葉を教えたならば、その子供は痛いときはもちろん眠いときも、不快なときも、不安なときもべそをかきながら「痛いよー」と言うようになってしまうだろう。

二つ目は痛いときに子供が泣くということが、痛みという「感覚の根源的で自然な表出 (Ausdruck, expression)」になっていることである。ウィトゲンシュタインはこの点を繰り返し強調している。

「個人的経験 (以下 LPS と略記)」 p.240. : 「歯痛」という語を使ってわれわれが行う [言語] ゲームは、われわれが歯痛の表出と呼ぶ振る舞いが存在することに完全に依存して

いる。

事実としてわれわれや子供達のほとんどが痛みの表出という振る舞い（泣いたり、呻いたり、顔を歪めたり等）をする。われわれや子供達のほとんどがそうすることに何らかの理由なり、根拠があるわけではないが、何しろそうしている。しかしこの振る舞いの一致があつて初めて、「痛い」という言葉を学ぶことができる。というのは、われわれ大人も子供達と同じように感覚語を習ったからに他ならない。「われわれはその子供に呻く代わりに『私は歯が痛い』という言葉を使用するように教える。そしてこれは、私自身がこの表現を教わった仕方でもある（LPS p.254.）」。子供にこの振る舞いがなくては、大人はいつ「痛い」と言うように教えればよいのか分からない。それはわれわれは大人も子供も、他人の感覚を直接感じるができないからである⁽⁴⁾。

PU I § 206：人類には共通の人間の行動様式があり、それがいわば座標系なのであつて、その基づいてわれわれは未知の言語を解釈する。

未知の言語だけではなく、母語の習得にも「人類に共通な行動様式」が不可欠となっている。

○類推説批判

しかし、「自分ならば痛みを感じるであろう状況に子供がいる場合に、子供に『痛い』と言いなさいと教える」というのは、いわゆる類推説に陥っているのではないか。これに対してウイトゲンシュタインは次のように類推説を批判している。

『断片(以下Zと略記)』§ 545：ある人が、子供が「痛み」という言葉の使用をどのように習得するのかを次のように説明する、と想定せよ。つまり、子供がある状況においてしかじかに振る舞うとき、その子供は私がそのような場合に感じるものを感じている、と私は考える。もしそうだとするならば、子供はその言葉を自分の感覚と結びつけ、その感覚が再び生じてくるときに、その言葉を使用するのだ、と私は考える。——この説明は何を明らかにしているのだろうか。次のように自らに問うてみよ、それはどのような種類の無知を取り除くのか。——他人が痛みを感じているのは確実であるとか、彼が痛みを感じているかどうかを疑うといったことは、他人に対する様々な自然で、本能的な振る舞いに属するものであり、われわれの言語は単にこの関係の補助手段であり、延長に過ぎないのである。われわれの言語ゲームは、根源的な振る舞いの延長に他ならない。（何故ならわれわれの言語ゲームは振る舞いだから。）(本能)[Z § § 540-541参照]

私的言語と規則

この感覚語の習得モデルで問題となる点は、大人が「痛み」と呼んでいるものは自分の痛みの感覚でしかありえないにもかかわらず、自分と同じような状況に子供がいる場合その子供はこの自分の痛みの感覚と同じものを持っていると想定している点であり、子供は「痛み」という語をこの子供自身の痛みの感覚と結びつけると考えている点である。つまりこの習得モデルは「痛み」という語の意味を私的な感覚そのものに求める、「私的言語」になっているのであり、また自分が痛みを感じたのと同じ状況にいる他人も自分と同じ感覚を持っているとする類推説に陥っている。

この類推説に対しては「反転スペクトル（あるいは、逆転スペクトル）」と呼ばれる問題がある。生まれつき色彩感覚の特殊な人がいると仮定する。生まれて以来一貫してその人にはわれわれに赤く見えるものが青く、われわれに青く見えるものが赤く見えている。ではこの人は「消防自動車は青い」と「晴れ渡った空は赤い」と言うだろうか。色彩語は後天的に学習されるものである。つまり、この人は自分には青く見えている消防車や、血液の色を「赤色」と習い、自分には赤く見えている空や海の色を「青色」と習う。その結果、その人はわれわれとは赤色と青色が反転しているにもかかわらず、「消防自動車は赤い」と言い、「晴れ渡った空は青い」と言うであろう。その人はわれわれと共に「赤い」「青い」を用いる言語ゲームを行うことができるようになる。そして周りの他人と何の齟齬もきたさないだろう。このようであるとするならば、自分と同じ状況（消防自動車の前に立っている）にいる他人は自分と同じ感覚を持っている（赤色を見ている）はずだという類推説はそもそも不必要なのである。

というのは、この人は自分の赤色と青色の色彩感覚が他人とは反転していることに、気づくこともないのではないか。そして他人も同様に、その人には青色と赤色が反転して見えていることは分からないのではないか。同じ状況において同じように振る舞っている限り、感覚内容（ここでは消防自動車の色）はどんなものでもよいのであり、したがってここには実は問題はないのであり、逆にここに問題を見出すことの方が誤解の現れなのである⁽⁵⁾。

○痛みの振る舞い

問題は、子供が怪我をしたときに泣くということが、痛みという「感覚の根源的で自然な表出」になっていることにある。そもそもある振る舞いがどうして「痛み」の表出であるといえるのだろうか。言い換えれば、われわれが泣いたり、呻いたりまた顔を歪めたりするときに感じているものが「痛み」だと、どうして言えるのか。やはり、振る舞いと感覚の関係は付けられないのではないか。

振る舞いと第一義的に関係づけられるべきは、感覚ではなく、状況の方ではないか。われわれは怪我をすると泣いたり、呻いたり、顔を歪めたりする。われわれは指を切ったり、足にも

のを落としたり、転んだりしたときの振る舞いが概ね一致している。この振る舞いの一致に何らかの理由なり、根拠があるわけではないが、事実として一致している。さらにこの同じような状況での振る舞いの一致は、その状況下で感じられているものが同じだから一致しているのではない。事柄は逆で、同じような状況で一致する振る舞いをしているときに感じられているものを「痛み」と呼び、そしてその振る舞いが「痛みの表出」とされるようになったのではないか。「痛み」さらに「感覚」というものは、同じような状況における振る舞いの一致を基に人類が長年かかって作り上げ、培ってきたものなのではないか。

○「痛い」の言語ゲーム

そうであるとする、一見大変奇妙ではあるが、われわれの感覚語を使用する言語ゲームはわれわれの振る舞いが軸となっているのであり、感覚そのものはいわばブラック・ボックスに入ったまま行われていることになる。ウィトゲンシュタインはこのような感覚について次のように述べている。

PU I § 293：私が私自身について、私は私自身の場合からのみ「痛み」という語が何を意味するのかを知るのだ、たとえば、——私は他人についても同様に〔彼は彼自身の場合からのみ「痛み」という語が何を意味するのかを知るのだ、と〕言わなければならないのか。それでは、私はどのようにして一つの場合をそのように無責任に一般化することができるのか。

さて、人はみな自分自身について次のように語る。私は、私自身の痛みからのみ、痛みが何であるのかを知るのだ。——そこで人はみな一つの箱を持っている、としよう。その中にはわれわれが「かぶと虫」と呼ぶあるものが入っている。しかし誰も他人の箱の中を覗くことはできない。そしてみな、自分自身のかぶと虫を見ることによるのみ、かぶと虫が何であるのかを知るのだ、と言うのである。——ここにおいて、人はみな各々の箱の中に異なるものを持っている、ということも可能であろう。いやさらに、箱の中のものが絶え間なく変化している、ということさえ想像可能であろう。——さてしかし、「かぶと虫」という語がこのような人々において〔有効な〕使用を持つとしたらどうであろうか。——そうであるとするれば、それはものの名前としての使用ではない。箱の中のものは言語ゲームにはまったく属していない。さらに或るもの (Etwas) としてすら属していない。なぜなら、箱は空っぽですらあり得るから。——いや、箱の中のものを素通りすることによって「短絡させられる」ことができる。箱の中のものは、それが何であっても無くされ得るのである。

つまり、次のようになる。もし人が感覚の表現の文法を「対象とその名前」というモ

私的言語と規則

デルにしたがって構成するならば、その対象は関係ないものとして考察から抜け落ちてしまうのである。

ここで、「私は私自身の場合からのみ『痛み』という語が何を意味するのかを知る」とする言語は私的言語であり、「対象とその名前」というモデル、つまり意味の対象説に基づく感覚の文法とは私的言語の文法に他ならない。では私的言語ではなく、「『痛い』の啼泣代替説」に基づく言語ゲームではどのようになるだろうか。対象である痛みという感覚が、「痛み」の意味そのもの、あるいは意味を決定するものなのではなく、逆に「痛み」という言葉の使用が痛みという感覚がどのようなものであるのかを決定している。言葉の使用が対象を、したがってその言葉の意味を決定している。そして「痛み」という言語の使用は、泣く代わりに「痛い」と言うという学習に基づき、この学習の可能性は、われわれの「痛みの根源的で自然な表出」に依存している。感覚語を使用する言語ゲームは根源的で自然な表出の上でのみ成立するのである。

それでは、痛みという感覚は「言語的構成物」ということになるのだろうか。この点についてはワイトゲンシュタイン自身次のように述べている。

LPS p.283. : 「私的経験」は（ある意味では同語反復命題（トートロジー）や矛盾命題に匹敵する）われわれの文法が作り出した退化した構成物である。この文法的怪物が今われわれをもてあそんでいる。われわれがこれを追い払おうとすると、ある経験、つまり歯痛の存在を否定してしまうかの様に思われるのである。

中期ワイトゲンシュタイン哲学においては、「言語を、明確な規則に従っているゲームという視点（PG I §36）」から考察している。つまり「言語」というゲームは「文法」という明確な規則に従っている、とする視点である。そしてこの視点においては、「文法における語の場所が、その語の意味（PG I §23）」であるとされる⁽⁶⁾。したがって中期哲学においては、「痛み」といった語は文法という明確な規則によって規定され、文法においてそれらの語の位置が確定されているのであり、したがって痛みなどの私的経験は言語的構成物に他ならない、ということになる。

では、この文法が作り出した構成物が、「退化している（degenerate）」とはどういうことか。「同語反復命題」や「矛盾命題」は世界がどのようなかとは無関係に、論理上無条件に真である命題と、無条件に偽である命題のことである。これに対して、「私は歯が痛い」といった「私的経験」の表現は事実についての言明であり、したがって事実を調べなければ真偽が確定できない言明のように見える。しかし発話者が誠実である限り、発話者の主張は無条件に

真と認められる。このように、真理性が固定されているという意味で「退化している」とされているのではないだろうか。そしてこのように確固として固定されているために、「痛み」の感覚はまさに今私が感じている当のものであり、リアルといえばこれ以上にリアルなものはない。したがって「痛み」が文法による構成物などであるはずがない。言語などであろうとなかろうとこの痛みはまさにある、と思われてしまうのだろう。

確かに、言語を習得してしまっている大人にとってはリアルであり、固定化されてはいるが、「痛み」も言葉であり、学習されたものに他ならない。したがって、大人においては「化石化している」と言えるほど固定化されていても、子供においてはこの語が適切に使用できるかどうかのテストがありうる。つまり、痛みを感じているであろう状況で「痛い」と言っているかどうか調べられる。例えば、子供の手をつねって、「痛い」と言うかそれとも「痒い」、「熱い」等と言うかどうかを見ることができる。では「痛み」等の感覚は文法が作り出した言語的構成物とすればよいのだろうか。というのは感覚語の習得の可能性が最終的に依存していたのは、文法規則に支配された言語ではなく、「根源的で自然な表出」というわれわれの振る舞いだからである。したがって、言語使用行為を強調して「言語ゲーム的構成物」と呼ぶべきであろう。

○規則の習得

この点が、ウィトゲンシュタイン哲学の中期から後期への展開の核心の一つだと思われる。つまりここに規則遵守の問題がある。というのは、規則も習得されるものであり、文法もこの習得される規則の一つに他ならないからである。感覚語の習得の仕方が、感覚というものの有り様を規定したように、規則の有り様もその習得の仕方が問題になると考えられる。

まず、われわれが規則を習得するとき、個々の具体例なしに、規則なるものそのものを直接教わるわけではない。それは「痛み」という言葉を習うとき、大人が痛みの感覚そのものを指して、「この感覚を『痛み』と呼びなさい」と教えることができないのと同じである。「痛み」という語は具体的に泣いている場面で、泣く代わりに「痛い」と言いなさい、と繰り返し教えられる。同様に例えば足し算は「 $1 + 2$ は3」、「 $1 + 3$ は4」、「 $1 + 4$ は5」と基本的な具体例がドリル学習される。そして、子供は足し算の規則を習得しているかどうかテストされる。同様に、「痛い」という語の使用を習得しているか否かをテストすることができる。この際もちろんテストするといっても、子供が足し算の規則なるものを持っているかどうか、足し算の能力なるものを持っているかどうかを、直接調べるわけではない。そのようなことは不可能である。そうではなく、具体的な個々の足し算の問題にどれだけの確率で正答するかが見られる。同様に、痛みなるものを持っているときに「痛い」と言っているかどうかを、直接調べるのではない。痛みの感覚があるときに「痛い」と言える能力なるものの有無を直接調べるわけでも

ない。痛みを感じているであろう具体的場面で「痛い」と言い、そうでない場面ではそう言っていないかどうか調べられる。

「痛み」の学習において痛みの感覚そのものが問題にされなかったように、足し算の規則の学習においても足し算の規則なるものは問題にされない。そして、「痛み」の学習によって習得されたものが「痛い」という語の使用であり、それが「痛み」の意味である。同様に、足し算の学習によって習得されたものが足し算の規則の使用であり、それが足し算の意味ということになる。したがって、「痛み」の意味が痛みという感覚なるものではないように、規則の意味は規則なるものではないことになる。逆に「痛み」という語の使用（行為）が痛みの感覚を作り出したように、足し算の規則の適用である具体的な個々の足し算の問題に答えること、その答えが合っているまた間違っているとったり言われたりすること、といった一連の行為が足し算の規則を作り出している、ことにならないだろうか。

○おわりに

そうであるならば、足し算の規則は個々の足し算の問題にどう答えるかを決定しない、つまり規則は行為を決定しない。それは、痛みの感覚は「痛み」という語の使用を決定しないのと同様である。それは逆に行為が規則を成立させ、行為が痛みが何であるかを規定しているからに他ならない。ここに、「文法規則に支配された言語使用」という中期の言語観から、具体的言語使用が最優先される「言語ゲーム論」への転回を見出すことができるのではないか。これに対して、クリプキのように『探求』の言語観つまり言語ゲーム論を、規則のパラドックスという懐疑論を受け入れた上での「懐疑的解決」としての懐疑的言語観としてしまったのでは、「文法規則からの言語使用の自律」というワイトゲンシュタイン中期哲学から後期哲学への展開を捉え損ねてしまうことになるだろう。

○注

- (1) クリプキの議論とその批判を要約すると、以下のようになる。クリプキは彼の議論を『探求』第I部第201節の冒頭の文章「われわれのパラドックスはこうであった。規則は行為の仕方を決定できない、何故なら如何なる行為の仕方もその規則と一致させられ得るからである」を引用することから始めている (Kripke p.7.)。そしてこの懐疑的パラドックスを展開した後、クリプキは次のように述べている。「何らかの語で何らかの事を意味している、といったことはあり得ない。語についてわれわれが行う新たな状況での適用は、すべて [正当化されていたり根拠があつてのことではなく] 暗闇におけるジャンプなのである。いかなる現在の意図も、われわれがしようとするいかなる事とも適合するように解釈されうる。したがってここには適合も不適合も存在し得ない (Kripke p.55.)」。つまりクリプキにとっては「ワイトゲンシュタインは、懐疑論のある新しい形を発明したのである。個人的には私はそれを、今日まで哲学が見てきた最も根源的で独創的な懐疑的問題であり、高度に異質な精神のみが作り出し得たもの (Kripke p.60.)」ということになる。そして「[ヒューム同様] ウイトゲ

ンシュタインもまた、懐疑的パラドックスを述べている。そしてヒュームのように、ウィトゲンシュタインはその懐疑的パラドックスを展開する彼自身の懐疑的議論をまず受け入れ、そして次にそのパラドックスの出現を克服するために『懐疑的解決』を与えるのである (Kripke p.68.)。つまりクリプキによれば、ウィトゲンシュタインは規則遵守についての「懐疑的パラドックス」を発明した懐疑論者であり、後期ウィトゲンシュタインの言語観はこの懐疑論を前提とする懐疑的言語観だということになる。

これに対してウィトゲンシュタイン研究者達は、ウィトゲンシュタインは懐疑論者などではない、その証左はクリプキがまず最初に掲げた『探求』第I部第201節の続きの部分にあるとしている。問題の『探求』第201節の全文を見てみる。

PU I § 201: われわれのパラドックスはこうであった。規則は行為の仕方を決定できない、何故なら如何なる行為の仕方もその規則と一致させられ得るからである。その答えはこうであった。すなわち、どんな行為の仕方も規則と一致させるようにできるのならば、それと矛盾させることもできる。それ故、ここには一致も不一致も存在しないことになる。

ここにはある誤解があることは、こう考えるときわれわれは解釈に次ぐ解釈を行っている点にすでに示されている。それはまるで、その解釈の背後に別の解釈を思いつくまではどの解釈も、少なくとも一瞬はわれわれを安心させるかのようである。これが示すことは、解釈ではないような規則の把握があるということであり、それは、規則のその都度の適用においてわれわれが「規則に従っている」とか「規則に反している」と言うことの中に現れるものである。

規則に従う行為はすべて解釈であると言いたくなる傾向が存在するのは、それ故に他ならない。しかし、規則のある表現を他の表現で置き換えることのみを、「解釈」と呼ぶべきである。

問題となるのは第二段落最初の「ここにはある誤解がある」という箇所にも他ならない。第一段落のパラドックスはこの「ある誤解(「規則の解釈説」と呼ばれている)」によって生じたのであり、この誤解が解ければパラドックスは解消される。したがってウィトゲンシュタインはこの懐疑的パラドックスを受け入れてなどいないのであり、さらに懐疑的解決を提出しているわけでもないということになる。そして本来あるべき規則の理解とは、「規則のその都度の適用においてわれわれが『規則に従っている』とか『規則に反している』と言うことの中に現れる」「解釈ではないような規則の把握」なのであり、この規則把握が解明されなければならないと研究者達は主張している。そして小論も、この「解釈ではない規則の把握」を明らかにする試みの一つである。

- (2) 『論考』の言語観については、拙論「論理の自律性と文法の自律性」参照。
- (3) []内は塚原挿入、以下同様。
- (4) 感覚の「根源的で自然な表出」という振る舞いをしない子供について詳しくは、拙論「ウィトゲンシュタインの『かぶと虫』」参照。
- (5) 「反転スペクトル」について詳しくは、拙論「ウィトゲンシュタインの『かぶと虫』」参照。
- (6) ウィトゲンシュタインの中期哲学については、拙論「言語の限界と自律」参照。

○文献 (訳文については、邦訳を参照したが、必ずしもそれらには従わなかった。)

L. Wittgenstein

私的言語と規則

- ・ TLP、『論考』：*Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul,1922. 邦訳：『論理哲学論考』、坂井秀寿訳、法政大学出版局、1968；『論理哲学論考』、奥 雅博訳、ワイトゲンシュタイン全集 1、大修館書店、1975；黒崎 宏訳・解説、『『論考』『青色本』読解』、産業図書、2001；野矢茂樹訳、『論理哲学論考』、岩波文庫、2003。
- ・ PG、『文法』：*Philosophische Grammatik*, hrsg. von R. Rhees, Basil Blackwell,1969. 邦訳：『哲学的文法 1』、山本 信訳、ワイトゲンシュタイン全集 3、『哲学的文法 2』、坂井秀寿訳、ワイトゲンシュタイン全集 4、大修館書店、『文法 1』1975、『文法 2』1976。
- ・ LPS、「個人的経験」：‘Notes for Lectures on “ Private Experience” and “ Sence Data ” ’, in J.C.Klagge and A. Nordmann (eds.), *Philosophical Occasions1912-1951*, Hackett Publishing Company, 1993. 邦訳：『『個人的経験』および『感覚与件』について』、大森荘蔵訳、ワイトゲンシュタイン全集6,大修館書店、1975。
- ・ PU、『探求』：*Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell,1953. 邦訳：『哲学探究』、藤本隆志訳、ワイトゲンシュタイン全集 8、大修館書店、1976；黒崎 宏訳・解説、『ワイトゲンシュタイン『哲学探究』第 I 部・読解』、産業図書、1994。
- ・ Z、『断片』：*Zettel*, G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright (eds.), Basil Blackwell,1967. 邦訳：『断片』、管 豊彦訳、ワイトゲンシュタイン全集 9、大修館書店、1975。

その他

- ・ S. A. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Basil Blackwell,1982. 邦訳：ソール A. クリプキ、『ワイトゲンシュタインのパラドックス——規則・私的言語・他人の心——』、黒崎 宏訳、産業図書、1983。
- ・ 塚原典央、「論理の自律性と文法の自律性」、『福井県立大学論集』、第13号、1998。
- ・ 塚原典央、「言語の限界と自律——ワイトゲンシュタイン哲学の展開についての一考察——」、『福井県立大学論集』、第16号、2000。
- ・ 塚原典央、「ワイトゲンシュタインの『かぶと虫』」、『福井県立大学論集』、第22号、2003。